

經濟論叢

第七十七卷 第三號

消費函數をめぐる省察……………高田保馬(1)

金融資本の概念と本質……………靜田均(17)

明治末期の財政政策……………眞藤素一(37)

栗原百壽著「農業問題入門」……………大藪輝雄(61)

[昭和三十一年三月]

京都大學經濟學會

金融資本の概念と本質

静 田 均

ヒルファードイングの帝國主義論を考察するには、まずもつて金融資本の意義を明かにしておかねばならぬ。なぜなら、帝國主義とは金融資本の經濟政策であるというのが、彼の根本的な考え方だからである。

ヒルファードイングの名著『金融資本論』は一九一〇年に刊行された。第一次世界大戦にさきだつまさに三年、こんにちからかぞえて約半世紀の昔にさかのぼる。一九二三年に第二版が出版された。しかし在りようは、單に舊著を再刷したにすぎない。彼の没後、一九四八年にいたつて、東ドイツからエルスナーが長い解説をそえて第三版を出しているが、これもまた本文は初版と少しもかわりはない。『金融資本論』は、『資本主義の最近の發展に関する一研究』という副題を擔つているけれども、その最近というのが十九世紀の末葉から二〇世紀の初頭にかけての時期をさしていることは、きわめて明白である。すなわちこの著作は、第一次大戦以前における資本主義經濟を分析の對象としたものにはかならない。しかるに第一次大戦後、資本主義經濟はさまざまの變貌をとげた。そうだとすると、『金融資本論』の理論内容は、その後の發展に對して果してそのまま妥當性を主張しうるであらうか。否、ヒルファードイングは第一次大戦後においても、なおかつ依然として舊來の見解を固持しつづけたであらうか。

これは明かに一つの問題でなければならぬ。

しかし、わたしの見るところでは、ヒルファードイングの見解は晩年にいたるまで本質的には何らの改訂も加えられなかつた、と推定して差支えないようにおもわれる。その證據として、われわれは一九三一年に發表された彼の論文『資本主義發展の自律性』(『Die Eigenständigkeit der kapitalistischen Entwicklung』 in "Kapital und Kapitalismus", herausgegeben von B. Harns, Bd. I, S. 20)をあげることができよう。この小篇の發表はヒルファードイングの死にさきだつ八年まえのことに屬し、おそらく彼の晩年を飾る唯一の學術論文であるとおもわれるが、その内容はほとんど舊著『金融資本論』の簡潔な要約にすぎず、かくべつ新しい理論的展開は見出されない。彼が一貫して舊説を固持したことは、これによつてほぼ的確に推察しえられる。要するに『金融資本論』は、ヒルファードイングの全生涯を賭けた文字どおりのライフ・ワークであつた、といつてよい。

ヒルファードイングは『金融資本論』の序文の中で書いている。「近代」資本主義の特徴をなすものはかの集積過程であつて、それは一方ではカルテルやトラストの形成による「自由競争の止揚」となつてあらわれ、他方では、銀行資本と産業資本とのますます緊密な關連となつてあらわれる。この關連をとおして、資本は……金融資本の形態をとる。それは資本のもつとも高度な、かつもつとも抽象的な現象形態をなす。右の引用が端的に語つてゐるように、資本主義の最近の發展は集積過程の中にその特性を露呈しているが、いうところの集積過程は二面をもつ。一面において、それはカルテル・トラストのごとき『資本主義的獨占』の形成であり、他面においては、銀行資本と産業資本の密接不離の結合である。金融資本は、要するにかかゝる集積過程の産物にはかならない。それは最高度の發展をとげた資本の現象形態であるだけ、それだけ神祕的である。では、この現象形態の奥にひそむ本質は何

か。否、ヒルファーディングはどんな角度から、どのようにそれを捉えたであろうか。一言でいえば、資本主義の歴史的発展を追跡し、その構造を分析することによつて、ということができよう。われわれの考察は、彼れの名著『金融資本論』および晩年の論文『自律性』をあわせ顧りみつつ、その輪廓をスケッチすることからはじめる。

二

近代工業の發展 自由競争の行われる資本主義の初期においては、産業資本が資本の支配的形態である。ところが資本主義の發展につれて、資本の有機的構成はたえず上昇する。いいかえると、勞賃に充用される可變資本にくらべて、物的な生産手段に充用される不變資本は、ますます増大する。のみならず、物的な不變資本のうちでも、機械その他の生産設備や建物よりなる固定資本のしめる割合は、原料その他の流動資本のしめる割合にくらべて、ますます増大する。しかもこのことは、競争のうえに決定的な變化をよびおこし、ますます強烈な企業集積および資本の集中を結果せざるをえない。けだし固定資本が大きな役割を演ずるようになると、いつたん投下された資本の移動は極めて困難となり、利潤率の低い産業部門から利潤率の高い産業部門にむかつて資本が流出することは、ほとんど不可能となるからである。かくて固定資本が大きな比重をしめる産業部門においては、競争戦はことによると數年にわたる長期の不況に導く。競争戦からの脱出口は、強大な企業にとつてさえ絶對的により不確實なものとなる。こうした産業の發展傾向から、企業の結合をとおして競争を排除し、市場を支配しようとする努力が試みられる。カルテルおよびトラストはかくして生れる。

要するに競争はたえず技術の進歩を促し、技術の進歩は固定資本の比重を高める。そしてますます増大する固定資本の重層は競争の性質を一變せしめ、利潤率均等化の障害をもたらす。この障害を克服せんがために、競争を排除し、市場の支配を確保すべく、企業との結合が行われ、ここに資本主義的獨占が形成される。ヒルファートディングの立論の骨子はおよそかくのごときものである。固定資本の意義に重點をおくことは、ヒルファートディングの特色の一つである。が、獨占形成の横杆としてマルクスの『利潤率の傾向的低落の法則』を援用しているのではないことは、注意を要する點であろう。

銀行の發展 銀行の役割は信用の授與にあるが、ヒルファートディングは産業信用を流通信用と資本信用の二つに分けている。流通信用というのは手形の振出しによる支拂手段の授與を意味し、貨幣流通の節約に役立つのみならず、流通過程の圓滑なる進行を可能ならしめるものであるが、銀行ははじめのうちもつばらこうした流通信用の媒介を主たる機能とした。しかるに資本主義の發達に伴う銀行の發達は、資本信用の授與を重要な任務とするにいたつた。資本信用とは、生産に必要な物資の調達のために貨幣資本を貸付けることを意味する。銀行は資本家階級の手の中にある遊休貨幣のみならず、他の諸階級の手の中にある遊休貨幣をも蒐集し、これを産業資本家に追加的な貨幣資本として提供し、生産の擴大に役立たしめる。かくして現實の蓄積過程はより急速により顯著に促進される。ここでヒルファートディングの強調するのは、固定資本の調達のため銀行が産業資本家に授與した資本信用は、銀行資本と産業資本の關連を強化するばかりでなく、銀行資本による産業資本の從屬化をもたらすという點である。いわく、『銀行が産業資本家に生産資本〔資本信用〕を融通するようになると、事情は一變する。ここにいたると銀行の利害關係は、もはや企業の一時的狀態や一時的市況に局限されるのではなくて、いまではむしろ企業の今後の運

命や市況の將來の形勢が重要となる。かくして一時的利害關係から一變して、繼續的利害關係となり、そして信用が大きければ大きいだけ、なかならず固定資本に轉化される貸付資本部分が多くなれば、多くなるほど、この利害關係はますます大きく、かつ永續的となる。そして同時に企業に對する銀行の勢力が増大する』（『金融資本論』第五章）。

企業形態の發展 資本主義の發展につれて、資本の集積が進行し、企業の規模が擴大することは、前述のとおりであるが、このことは企業形態の上に重大な變化をよびおこす。個人企業から株式會社への發展がすなわちそれだ。株式會社の經濟的意義は何處にあるであろうか。第一、株式の發行によつて貨幣資本の調達が容易となり、蓄積の異常なる促進が可能となる。第二、所有資本家である株主と機能資本家である企業者ないし經營者といちおう分離する結果、群小の株主は經營に參與することなく、單なる所有資本家として、利益金の配當うけるにとどまるに反し、經營の實權は少數の大株主の掌握するところとなる。第三、株式は配當證券であるから、配當を平均利子率で還元した資本價格をもつ。それは現實資本ないし生産資本とは異つた別箇の範疇に屬する「擬制資本」にはかならない。そうしてかかる擬制資本である株式の發行價格と現實の生産資本の貨幣價值との差額は、いわゆる創業者利得を形成し、それは株式の發行者に歸屬する。創業者利得の成立は、株式會社の設立および増資新株の發行に強い刺戟を與えるのみならず、銀行は株式の發行業務を擔當することによつて、創業者利得を獲得する。第四、株式會社はひろく社會の遊休貨幣資本をかきあつめることができるから、個人企業に見られる個人の所有財産の限界を突破して、企業の規模を擴大することができる。したがつて資本（所有）の集中よりもはるかに急速に資本（生産）の集積を可能ならしめる。

ところで銀行が産業資金の大口の需要に應ずるためには、それだけ貸付可能な貨幣資本を準備しなければならぬ。銀行が株式會社の形態をとり、また銀行の集積が行われるのは、まさにこのためである。産業資本の集積は銀行資本の集積を促進する。かくして少數の大銀行が成立し、金融市場の主導權を掌握する。が、こうした銀行資本の集積は、逆に産業資本の集積を促進する。兩者は相互作用の關係にたつ。

三

以上われわれはヒルファードディングに依據しつつ、資本主義の發展につれて、産業・銀行・企業形態がいかなる變化を示したか、またそれら相互のあいだにいかなる作用と反作用の關係が存在するを明かにした。この豫備的敘述を前提として、はじめて彼の金融資本の概念に肉迫することができる。われわれはまず、多くの人々によつてもつとも頻繁に引用される一節を、ヒルファードディングの主著の中から摘出しよう。「銀行に對する産業の依存 (Industry's dependence) は、それゆゑ所有關係の結果である。産業資本のうち、これを充用する産業家の所有でない部分が、ますます増加する。彼等はこの資本の處理權をば銀行をとおしてのみ獲得するのであつて、銀行は彼等に對しては所有者を代表する。のみならず他方、銀行は資本のますます大なる部分を産業に固定せざるをえない。銀行はこれによつてますます産業資本家となる。わたしはこのようにな仕方、實際には、産業資本に轉化されている銀行資本、それゆゑ、貨幣形態における資本を名づけて金融資本とよぶ。それは、所有者たちにとつてはいつも貨幣形態をもつものであり、彼等により貨幣資本すなわち利子うみ資本の形態で投資されるものであり、かつ彼等によつていつでも貨幣形態で回収されうるものである」(第十四章)。

右の章句は、ヒルファードイングの與えた金融資本の古典的定義として、ひろく人口に膾炙するところであり、一見したかぎりでは、何ら疑問の餘地を殘さぬかのようにおもわれる。しかし立ち入つて考へるならば、多少の問題を孕んでいることを見逃すわけにはいかない。ここで強調されているのは、銀行資本の産業資本に對する優位性ということであり、兩者の關係は對等の關係ではなく、むしろ上下の關係であるとされる。そしてまさにこの點に、ひとはヒルファードイング獨特の異色ある主張を見出すことができるであらう。しかし産業資本のうち、これを運用する産業資本家たちの所有に屬しない部分が増大するといふ主張は、どのように理解されるべきであらうか。

こんにちの企業はおおむね株式會社の形態をとるが、その資本構成は拂込資本金・積立金などのような自己資本と社債・借入金のような他人資本に分けられる。もし銀行と事業會社の關係が、借入金や社債をとおしての關係であるとするならば、融資による債權者と債務者の關係にすぎない。融資が巨額に上らないかぎり、必ずしもつねに支配從屬の關係を生ずるとはいきれぬであらう。しかしヒルファードイングの眼中にあるのは、こうした融資關係だけではなくて、投資關係をも含むと解した方が、妥當であるかもしれぬ。事業會社の株式發行に際して、銀行が積極的に參與し、みずからそれを引受けるとすれば、銀行は所有株式をとおして、つまり株主として、事業會社の經營に参加することは、えてしてありがちとなるにちがいない。この場合、銀行の事業會社に對する關係が支配從屬の性格をより帯びやすいことは、容易に理解できよう。

産業資本の銀行資本に對する依存という表現は、『金融資本論』の隨所に見出されるところであつて、ほとんど枚舉にいとまないほどであるが、ここではもう一つだけ引用を附け加へるとどめる。『信用の發展は……ただに

資本家階級の總豫備資本だけでなく、非生産的階級の貨幣の大部分をも、産業に融通させるようになる。いいかえれば、こんにちの産業は、産業資本家の所有する總資本よりも、はるかに大きな資本で經營される。資本主義的發展とともに、非生産的階級から銀行に預けられ、その手をへて産業資本家に融通される貨幣額もまた、たえず増加する。産業に缺くことのできないこれらの貨幣を處理する權利は、銀行にある。そこで資本主義とそれの信用組織との發達するにつれて、銀行への産業の依存が増してくる』（第十四章）。

四

すでに二三のひとびとによつて指摘されているところだが、『金融資本論』を通讀してわれわれの切實に感じるのは、ヒルファードディングがつねにドイツを主たる考察の舞臺に選んでいるということである。そしてこのことは、マルクスが『資本論』の執筆にあたつてイギリスを主たる分析の對象としたのとくらべて、顯著な對照をなすものゝごとくである。（E. Bernstein, Die moderne Finanz im Lichte der Marxschen Theorie, A. f. S. u. S. Bd. 35, 1912, S. 217; G. W. Edwards, The Evolution of Finance Capitalism, 1936, p. 80）ヒルファードディングははつきりと書いてゐる。『資本の集中および集積の程度、すなわちカルテルやトラストの發展、産業に對する銀行の支配、要するにあらゆる資本の金融資本化の程度を標準とすれば、自由貿易國のイギリスではなく、かえつて保護關稅國のドイツやアメリカが、資本主義的發展の典型國となつた』（第二十一章）。

産業革命の洗禮をいちはやくうけたイギリスは、『世界の工場』として十九世紀の六〇年代まで國際市場に君臨していたのにひきかえて、ドイツは資本主義的に立ちあぐれた後進國として、長らくその後塵を拜していた。それ

がプロシヤを盟主として近代的統一國家を形成した七〇年以後、まさに旭日昇天のいきおいでひとすぢに工業化の過程を薦進し、ついには先進國イギリスをしりえに蹙着たらしめるほどの驚異的な發展を示すにいたつた。なかなくカルテル、シンジケートの成立では、全世界に冠絶するがごとき壯觀を呈した。しかも注目にあたいするのは、大銀行がつねに先頭に立つて工業の躍進に積極的な寄與をなしたということである。ドイツの銀行は『信用銀行』であり、『兼營銀行』であつて、イギリス流の預金銀行ないし商業銀行ではなく、長期の工業金融に華々しい役割を演じた。換言すれば、單なる貸付ばかりでなく、發行業務をも營み、個人企業を株式會社にあらためる組織變更に關しても、また株式會社の増資新株の募集に關しても、いたれりつくせりの指導と援助とを惜しまない。この點においてドイツとイギリスとは全く面目を異にし、顯著なる對照を形づくつてゐる。この相違はいつたいどこからきたのであるか。第一、國民貯蓄の缺乏、資金形成の貧困、第二、産業構造が重工業を指向していたこと、従つて巨額の固定資本を調達する必要に迫られたこと。第三、これがため銀行は工業資金の供給にあたるべく餘儀なくされたこと、第四、株式會社法がいわゆる同時設立主義をとつたことは、いつそう右の傾向に拍車をかけたことなど、理由は一二にしてとどまらないが、どつちも銀行が事業會社の育成と監護に極度の熱意をもつたことは、たしかである。そしてそれは銀行よりする重役の送り込み、銀行と事業會社の人的結合となつて現れた。ヒルファデーディングが銀行資本による産業の支配をうんぬんするのは、けつして偶然ではない。同様の主張は、ヤイデルスヤシエルトツェ・ゲーバニッツにも見出すことができるのである。

しかし、いわば特殊ドイツ的な情景は、必ずしもイギリスに對してそのまま妥當するとはいひがたい。事實においてヒルファデーディングじしん、イギリスとドイツの相違點につき、そこそこで特別な注意を拂つてゐる

ように見える。念のため若干の引用を取上げてしよう。引用の一、『イギリスにおける銀行制度の發展はこれと異り、銀行をして産業の上に影響することを遙かにより少からしめたが、この事實こそイギリスにおけるカルテル化を困難ならしめ、またそれが成立した場合にも、このイギリスのカルテルをしてたいていルーズな價格協定……たらしめた一因であることは、疑問の餘地がない。……そのほかイギリスの銀行の發展は、いま一つの現象を生んだ。ドイツやアメリカでは大部分、銀行取締役などの人的結合が産業の利益共同體をもたらしたが、イギリスではそれはより小さな役割しか演じなかつた。ここでの人的結合は産業株式會社の取締役たちによつてなすとげられたのである』（第十一章）。引用の二、『そこ「イギリス」では、預金銀行はただ流通信用を媒介するだけであるから、預金利子は非常に低い。ゆえに預金は株の買入をとおして絶えず産業的投資部に流出しつゝある。この場合には、公衆が直接に、産業銀行と預金銀行との結合に際して銀行のすることを言うわけである。……このことは、イギリスでは産業がドイツほど銀行資本に依存していないことを意味する』（第十四章）。引用の三、『ドイツの銀行は最初から、ドイツの産業株式會社に所要の資本を融通するという任務、すなわちただに流通信用のみにとどまらず、資本信用の面倒をもみるという任務をもつていた。それゆゑ産業に對する銀行の關係は、最初からドイツおよび——多少形を異にしているが——アメリカにおいては、イギリスにおけるのとは全く異なるものたらざるをえなかつた。この相違はなかならずドイツの資本主義的發展の立ちおくれたこと、おくれ馳せに始つたことに由來するが、逆に産業資本と銀行資本との間におけるこうした内面的連絡は、ドイツおよびアメリカにおけるより高き資本主義的組織形態への發展上、重大なる一契機となつたのである』（第二十一章）。

五

われわれはさきに金融資本に關するヒルファードイングの定義としてあまねく人口に膾炙している一節を引用した。この一節についてはレーニンの有名な批評がある。いわく、『この定義は、その中に最も重要な要素の一つ——生産と資本との集積は、それが獨占到導きつつあり、またすでに導いたほどの高度に發達しているということに言及してはいないかぎりでは、不完全である』(『帝國主義論』第三章)と。なるほどヒルファードイングはいわゆる『定義』の中で産業獨占到言及しなかつたことは否まれないが、しかしそうだからといつて、彼が金融資本の概念をうち出すにあつて産業獨占を無視したとか、輕視したとかいうのは當を失するであろう。むしろ銀行獨占と産業獨占との密接不離の關係を念頭におき、かつこれを強調していることは、いやしくも『金融資本論』を通讀するかぎり、なんびとも隨所にこれを發見するところであるにちがいない。この意味において、レーニンの右の評言はいささか誇張に失する嫌いがあるようにおもわれる。事實、レーニン自身ひきつづいてこう書いてゐる。『もつとも一般にヒルファードイングの敘述全體の中では、とりわけこの定義が引合に出された章の前の二つの章では、資本主義的獨占の役割が強調されているが』(第三章)と。すなわち『金融資本論』の全巻を通して資本主義的獨占が重要な構成要素をなしていることは、レーニンも明かに肯定するところである。したがつて、この點に關するかぎり、兩者のあいだに根本的な見解の相違は存しないといわねばならぬ。もしあるとすれば、おのずから別箇のところを求められねばならぬであらう。

レーニンの主張もけつして一義的に明確ではない。しかしつぎの一句は、金融資本に關するレーニンの把握を最

も端的に語るものといふことができよう。『生産の集積、そこから發生する獨占、銀行と産業との融合あるいは癒着、——これらの點に、金融資本の發生史と金融資本の概念の内容がある』（第三章）。この一句は、産業獨占と銀行獨占の融合ないし癒着こそ金融資本の本質である、というにひとしい。『癒着』という表現はもとブハーリンに在るものであり、レーニンはそのまま踏襲したものとごとくであるが、ともあれ融合(Verschmelzung)ないし癒着(Verwachsen)という表現はヒルファードイングの關連(Beziehung)という表現よりは、より強い響きをもつ言葉であり、そこにニュアンスの相違がにじみでているかのようにとれぬでもない。

しかし兩者を分つ相違は、おそらく別の點にあるであらう。問題はむしろ産業獨占と銀行獨占との密接不離な關係において、銀行獨占が優位をしめ、または主導權を發揮すると見るが、それとも産業獨占と銀行獨占とは融合して表裏一體となり、いずれが優位を保つとも、主導權をにぎるともいえないと見るかにかかつてゐる。ヒルファードイングが、しばしば産業資本の銀行資本への依存を繰り返すとき、彼は銀行獨占の産業獨占に對する支配を強調したものと解すべき充分の理由がある。これに反して、レーニンが産業獨占と銀行獨占との融合を口にするとき、兩者は渾然として表裏一體をなし、優位性などということは論外であると主張するものの如くにとれる。現にこうした解釋は、わが學界においてかなり多くの人々によつて説かれきたつたところである。しかし、わたしはこの説に對してただちに賛意を表すべく、いささか躊躇を感じざるをえない。レーニンの著書の中には、かかる解釋をくつがえすにたる幾多の章句を見出すことができるからである。

引用の一、『貨幣資本と銀行は、……ひとにぎりの最も巨大な經營のこうした優越をよりいつそう壓倒的なものにしてゐる。しかもそれは、まつたく文字どおりの意味でそうなのだ。すなわち數百萬の中小の「經營主」と一部

の大「經營主」さえもが、實際には數百の大金融をおこなう百萬長者への完全な依存のもとにおかれているのである』(『帝國主義論』第三章)。

引用の二、『銀行は特定の資本家たちのために當座勘定を設けることによつて、外見的には純粹に技術的な、もつぱら補助的な作業とおもわれるような機能を営む。しかし、こうした作業が増大して廣範圍におよぶや否や、ひとにぎりの獨占者たちが全資本主義社會における商工業の作業を自己に服従させることが、明かとなつてくる。』
というのが、彼等は——彼等の銀行取引や當座勘定やその他の金融操作を通して——まず個々の資本家の營業狀態に關する正確な情報をにぎり、つぎには彼等を制御して、信用を擴大するが縮少するか、容易にするか、困難にするかによつて、彼等に影響を與え、そして最後には彼等の運命をいつさいがいつさい決定し、彼等の収益性を決定し、彼等から資本を引きあげたり、または彼等の資本を急速かつ大規模に増大したりする可能性を與えるからである』(第二章)。

以上を一言に要約するならば、銀行は金融のルートをとおして商工業に對する生殺與奪の實權を掌握する、というにひとしい。果してそうだとすると、レーニンもヒルファードイニングと全く軌を一にし、兩者の間に根本的な見解の相違を見出すことは、困難であると考えられる。しかし、そう簡単に割り切つてよいのであろうか。わたしは不敏にしていま即座に明快な斷案を下すことはできない。レーニンはつぎのようにも書いているのである。『銀行がその顧客の經濟狀態をより詳細に、より完全に知りうるようになるならば——そして實際にそうなつていながら——その結果、銀行に對して産業資本家がいよいよ完全に從屬するようになる。それとともに、いわば銀行と最大の商工業との人的結合が發展する。すなわち株式を所有するとか、商工業の監査役會(あるいは取締役會)の

役員に銀行の取締役がはいりこむとか、またはその逆の方法によつて、この兩者の融合が發展する』(第二章)と。

六

金融資本に關するヒルファードイニングの見解に對する批判者の一人として、われわれはグロスマンの發言を無視するわけにはいかない。彼は大著『資本主義體制の蓄積法則と崩壞法則』Das Akkumulations- und Zusammenbruchsgesetz des kapitalistischen Systems. 1929. (森谷克巳譯『資本蓄積並びに崩壞の理論』)のなかでかなり痛烈な駁撃を加えている。その論點はおよそ二つに分れる。

第一、ヒルファードイニングの所説はマルクス學說の基本觀念と相容れないということ。なぜかというに、『銀行による産業支配に關するヒルファードイニングの主張が正當であるとしたら、資本主義の姿態形成上における生産過程の決定的意義を主張するマルクスの學說は、ために震撼されることになるであろう。ただしこの決定的意義は……生産過程すなわち産業に歸せしめられないで金融資本に、それゆえ流通部面の姿態形成に歸せしめられているからである』。

このグロスマンの批評は果してどれだけの價值をもつか。率直にいつて、わたしは疑問におもう。重要なのはむしろ第二の論點であろう。

第二の論點は、ヒルファードイニングの説明が資本主義の現實の發展傾向と矛盾している、ということである。グロスマンはいう、『ヒルファードイニングの述べた銀行の優越ということが、資本主義發展のある特定の一時期について妥當することは、もとより異論のないところである。しかしその優越は、ただ資本主義發展の一定段階にの

み照應するものであつて、ヒルファーディングの主張するように、資本の「歴史的傾向」を特徴づけるものではないとしてゐるのである」と。すなわち産業資本に對する銀行の優位性という現象は、資本主義の發展を貫く一般的な歴史的傾向ではなく、限られたある時期にのみ妥當するいわば過渡的な現象にすぎない。グロスマンによると、『歴史的過程の経過するにつれて、銀行資本と産業資本との相互關係の上には、必然的な交替が生ずる』のであつて、しかもこのことは『資本蓄積の法則からすれば自明の理である』。彼は蓄積の段階を三つに區別する。第一は、産業發展の可能性がほとんど無限であるかに見えるにも拘らず、産業それ自身の資本形成が不十分であるため、外部からの信用の流入にまたなければならぬ段階。この段階においては、『ようやく開花しはじめた年若き産業に對し、銀行は信用の供與者として絶大の力をふるう』。ドイツについては、『第一次』大戦直前の二〇年間にこのような様相によつて特徴づけられていた。そして『この時代こそヒルファーディングがその腦裡に描いた「金融資本」の時代なのである』。しかしそれは『資本主義の開花期にのみあてはまる』にすぎない。

ところでグロスマンによれば、『資本主義のより高次の段階になると、産業はますます外部からの資本流入に依存しなくなる。けだし産業は、書替えや積立金の設定のごとき固有の手段をもつぱら利用して、資金の調達を行うようになる。換言すれば「自己金融」に移行するからだ』。そしてこれが資本蓄積の第二期にあたるわけであるが、最後に第三期にはいと、『産業は原經營内における自己の収益すらこれを有利に投資せんとするに際して絶えず大きな困難にでくわす。かくて原經營はその利得をば、他の諸産業を自己の勢力範圍内に引き入れるために利用する。…實際のところ、産業が銀行に従屬するといふことがごときことは、イギリスでもフランスでも、北アメリカ合衆國ではなおさらのこと、問題にならない。北アメリカ合衆國では、むしろ諸銀行を支配する産業が存在している。

産業は相當巨額の資金を銀行に預金しているか、さもなければ、この資金のために有利な投資口を発見することを目的とするところの、しかもますますこの目的を重視するところの、自己の銀行さえも創設しているのである。』
(原本五六二頁以下、譯本七二八頁以下)。

要するにグロスマンは社會總資本の蓄積過程を三期にわけ、これに照應する産業と銀行の關係の變遷を指摘し、ヒルファーディングの説は第一期にのみ妥當するにすぎないと主張する。こうした批判は注目にあたいする一面をもつているに違いないが、それにも拘らずにわかには首肯しがたい面を含むことも、争いがたい。第一、銀行の産業支配という事實は、蓄積の第一期に關するかぎり妥當性をもつとグロスマンは主張するけれども、かかる第一期とは自由競争の時代、いわゆる産業資本主義の時代をさすのか、それとも資本主義的獨占の形成ないし確立期をさすのか、明かでない。彼が一方において、『ようやく開花しはじめた年若き産業』とか、『資本主義の開花期』とか書き、また『資本論』から引用を試みているところから判断すると、獨占資本主義以前をさすもののごとくにもとれるが、他方において彼は第一次大戦前の二〇年間、すなわち一九世紀の九〇年代から今世紀の最初の一〇年にかけてのドイツを具體例として掲げている。しかしこの時期はドイツにおける近代的獨占の確立期であることは、一般に認められているところである。そもそもヒルファーディングが金融資本を問題としたのは、獨占期における資本の存在形態としてであつた。問題は單なる産業と銀行との關係にあるのではなく、獨占的な巨大産業資本と獨占的な巨大銀行資本との關係にあるのである。グロスマンの主張はピントがはずれているのではないか。實のところ、ヒルファーディングがしばしば口にする産業の銀行への從屬という問題は、『金融資本論』の刊行の直後すでにドイツにおいて専門の學者の間で論ぜられていたのであつて、とりわけA・ウェーバーやT・フォーゲルシュタ

インのごときは、産業の自主化、銀行の掣肘からの離脱を強調しているから、ヒルファーディングの所説に對しては、懷疑的であつたと見ることができらる。

それはともかくとして、グロスマンの主張する資本蓄積の第二期および第三期は、第一次大戦後を想定したものと解されるが、彼の著書が出版されたのは一九二九年のことである。このわずか二〇年の間に第一期から第二期および第三期への發展と移行が起つたとすれば、それはあまりにも急テンポの飛躍であるといわねばなるまい。果してそのような激變が、實際にまきおこつたのであるうか。具體的な史實の裏づけを缺いているかに見える彼の主張は、讀者を納得せしめる上になお薄弱であるようにわたしにはおもわれる。

七

金融資本をめぐるヒルファーディング批判として、近年とりわけ注目をひいたものに、スウィーजीがある(P. M. Sweezy, *The Theory of Capitalist Development*, 1948. 中村金治譯『資本主義發展の理論』)。スウィーजीによると、ヒルファーディングは資本主義發展の最近の段階における金融支配の重要性を過大評價し、資本主義發展の過渡的段階をば繼續的な長期趨勢と見誤つた、というのである。より具體的に指摘すれば、論點は二つに要約することができる。

第一、蓄積過程の最近における最も重要な變化は、事業會社の内部金融(*internal corporate finance*)の成長である。こんにちアメリカの大會社は利益金の社内留保にとめると同時に、固定設備の減價償却を怠らないので、莫大な自己資金を蓄積しているのであつて、事業の經營においても、擴大においても、銀行の助けをからずに自分

て資金を賄うまでに成長しているから、銀行によつて死命を制せられるというような事態は原則としてもはや存しない。しかるにヒルファードイグに固有の金融支配という先入観念は、こうした新しい變化の認識をさまたげている。現に彼はグロースマンによつて批判を加えられたに拘らず、一九三一年の論文『自律性』においても依然として舊説を墨守している。

第二、ヒルファードイグは右の先入観念に囚われて、社會主義社會の樹立に伴う課題の性質と困難について安易な幻想に陥つた。ベルリン六大銀行の掌握は、大産業の最も重要な部面の掌握を意味するという見解の如き、まさにそれであつて、社會主義的政策の基礎としてはなお未熟であることを自覺していない。

以上のような論據からスウィージイの引き出した結論はこうである。いわく、金融資本という表現は、必ずしもヒルファードイグがそれに與えた含意をもつものではないと。かくてスウィージイはわざと金融資本という用語をさげ、獨占資本という表現を採用するのである（原本二六八頁、譯本三六五頁）。

スウィージイがグロースマンから影響をうけたことは、察するにたかくない。しかし單なる燒直しでないこともまた明かである。資本主義の初期において、産業が銀行に依存する度合の多いことを認めながら、資本主義が成長するにつれて、産業は次第に銀行から獨立し、みずからの足で歩むようになること、一九三〇年にいたつて顯著となつたアメリカにおける『投資銀行家の没落』は最も雄辯に右の事實を裏書きしていることを、スウィージイは力説してやまなす（The Present as History, 1934, p. 189, 都智重人譯『歴史としての現代』一七六頁以下）。

グロスマンやスウィージの説は、銀行資本の産業支配というヒルファードイングの見解が、未成熟期の資本主義にこそ妥當すれ、資本主義の成熟期には妥當しないと主張するかぎりにおいて、大局的に一致している。たしかにヒルファードイングは銀行資本への産業の依存をいたるところで繰り返して強調しているにちがいないが、しかし仔細に點檢すると、『金融資本論』の中には、これとやや異つた、より本質的とおもわれる主張がなされていることを見落すわけにはいかならぬ。

さきに掲げたところの、一般に金融資本の古典的定義と見なされている章句につづいて、ヒルファードイングは書いてある。『銀行資本の處理權をもつものは銀行であり、銀行の支配權をもつものは銀行株の過半数の所有者である。所有の集積の進むにつれて、銀行に對する勢力を興える擬制資本の所有者と産業に對する勢力を興える擬制資本の所有者とが、ますます同一となることは、明かである。まして……大銀行が擬制資本の處理權をますます得つつあるにおいては、なおさらである』(第十四章)。「産業がますます銀行資本への依存を高めつつあると述べたからといつて、それは決して産業貴族もまた銀行貴族に依存するなどということの意味するわけではない。むしろあたかも資本そのものが、その最高段階で金融資本となるように、資本貴族(Kapitaladel)つまり金融資本家(Finanzkapitalist)は、總國民資本に對する處理權をますます銀行資本の支配という形態で統一するのである。ここでもまた人的結合が重要な役割を演じる』(第十四章)と。

右の引用句は、そもそも何を語つているのであるうか。ほかでもない。ヒルファードイングは金融資本の核心を一連の『資本貴族』(日本の在來語でいえば『財閥』また『富豪』)に見出し、彼等が株式の所有および人的結合を通して、幾多の産業資本や銀行資本を支配し、統轄することを端的に指摘しているのだ。産業資本を直接に支配す

るか、銀行資本の媒介を通していわば間接的に支配するかは、必ずしも第一義的に重要な問題ではあるまい。ヒルファードイングによる金融資本の全機構的把握が、以上の如くであるとするならば、それはひつききようするにコンツェルンであり、スウィージイのいわゆる利益集團 (Interest Group) にはかならぬ、といえよう。

念のため、もう一句あげておく。『金融資本は資本の統一化を意味する。以前には分離していた産業資本・商業資本および銀行資本の諸部面は、いまでは産業と銀行との主人たちが緊密な人的結合によつて結集した大金融業者 (Toke Finanz) の共同指導のもとにおかれている。この結合そのものは、大きな獨占的結合による個別的資本家の自由競争の止揚を基礎とする』(第二十一章)。ここで説かれているのは、大金融業者の共同指導による多數企業の結集體であり、このネット・ワークこそが資本の統一化としての金融資本の威力を語るもの、と解される。同時にわたしは、そこにヒルファードイングの金融資本に關する大乘の規定を見出すことができる、と考えるのである。銀行資本による産業支配という規定は、『金融資本論』の中におけるむしろ小乘的な教義にすぎないのであるまいか。